だから、 芥川賞を杭州に持ってきた時一緒だったことがあります。 はそうも 火野葦平が生きていれば面白い論争になったと思いますよ。 いかずに、少しずつ読んでいます。『南京への道』は火野葦平が従軍したコース 『南京への道』を書いてますが、 私は目が悪くてめったに本は読めないが、 火野とは小林秀雄が これ

ようになっている。 かげで報道部ができた。 大東

亜戦争後は

海外への

アピールの必要もなくなり、 平格的に外国へ写真の提供をするようになった。 まもなく軍は報道の重要性を認めるようになり、 イデオロギーで事実をゆがめ、それがまかり通っている世の中になっています 日本工房も上海にプレス・ユニオン・フォト・サービスをつくり、 小柳氏もそのまま中国での仕事を続けた。 また、 報道写真から記録写真に重点をおく 中支派遣軍 の馬淵逸雄中

失明に近く、 小柳氏は戦後もカメラマンとして活躍した。小柳氏から最初葉書をいただいた時 ほとんどけんとうをつけて書きました」

うかがって話を聞くのはいったんあきらめたのだが

という葉書をもらった。それで、

しばらくして意を決して申込むと了解してくれた。 小柳氏は宮崎県の川南町に住んでいた。五十年以上東京、鎌倉に住んでいたが 宮崎の知人から来るように薦められて、ここに移っている。移ったのは、 九州で特攻隊の写真を撮ったが、その人たちの霊をなぐさめたい気持があったか 九歳であるが 年に一度は上京し、 旧交を暖めているという。 十年ほ

第四章

外交官の見た南京

……佐々木少将は陸軍きっての中国通で、蔣介石以下国民党領袖のほとんどと親しく、国民党の革命にもよく理解を示していた。中国に愛情の革命にもよく理解を示していた。中国に愛情の時の南京を最も正しく伝えているのではなかろうか。私は南京虐殺と言われているものを見たことも、聞いたこともなかった。南京ではいたことも、聞いたこともなかった。南京ではいるいろあったと言われているが、佐々木少将は陸軍きっての中国通で、蔣介のいろあったと言われているが、佐々木少将は陸軍きっての中国通で、蔣介のいるあったとが事実ではなかろうかと思って

(領事官補・岩井英一氏の証言より



南京中山路あたり。どこで入手したのか、馬車に日の丸旗を立て、中国人を乗せて 走る日本兵(昭和12年12月23日)

外交官の見た南京

当時は南京を落とせば中国は参ると考えていましたか

岩井英一氏の証

くるのでよく知られている。 岩井英一氏は東亜同文書院を出た外務省の中国通で、 る人である。また、 成都事件、 興亜建設運動など中国を舞台にした出来事に登場して 軍に多くの人脈を持つ ていたと言

話をほしいとある。さっそく電話を差し上げると、あすから名古屋方面に旅行に行くから、 会うのは次の週にしましょう、ということになった。昭和五十九年のことである。 いとうかがいをたてると、思いもかけず、長文の手紙をいただいた。手紙には前もって電 昭和十三年はじめ頃上海にい た、ということをたよりに、 南京事件につい て話を聞きた

岩井氏には『回想の上海』という回顧録があるが、回顧録に書けない話まで話してくれた。 柔道をやっていたというだけあって、体はがっちりしている。記憶力もすばらしく、 長。影佐氏以外は影佐氏の人選に任せられた。第一回目が八月十三日、赤坂の料亭で予定 は河相情報部長、田中重徳情報部第一課長、それに岩井氏。陸軍側からは影佐禎昭支那課 されていた。 の対中国外交をこと細かに覚えており、その頃のことを一時間にわたって話してくれた。 外務省はもっと平生から陸軍とつき合って情報交換する必要があると考えていた岩井氏 岩井氏は明治三十二年生れで、お会いした時は八十五歳であったがとにかく元気だ。昔 河相(達夫)情報部長に相談し、月一回陸軍と食事会を開くことにした。外務省から その日、 東京では二個師団の上海派遣が決まり、 一方上海では中国軍と陸戦

いた岩井氏を前に、影佐氏はこう言った。 たもう一人の渡左近中佐(参謀本部支那課長)は来なかった。この席上、 って来た。影佐氏の人選による川本芳太郎少佐(軍務局軍務課員)も来たが、 つい に交戦 陸軍省も外務省も大騒ぎである。 どうかと思ってい 膺懲を主張して たが 予定されて 影佐氏

「上海に二個師団、青島に一個師団を派遣します」

それを聞いた岩井氏は反論した。

が来る」 「派遣できる師団はすべて上海へ派遣すべきだ。 岩井氏は南京を攻めれば中国は参るのではないかと思っていた。影佐氏も最後はそれに そして南京を攻略せよ、 そうすれ ば講和

同調した。 この後、 八月、 九月と岩井氏は北京・天津に出張し、 十二月には上海・南京に

は戦争は終わらないと思っていた。 んでるような気になってしまうこともある。あれこれ一週間の船旅だ。成都はさらにその 「私はその前の年、成都総領事館に赴任するため、南京から重慶まで船で行った。重慶に 中国と戦争になれば大変だとは思っていた。 何度か船を小さいのに乗りかえる。江は蛇行しており、昨日と全く同じ所を進 気が遠くなるほど遠い。 しかし、 その頃すでに、 相手の首都を落とすのは戦争の だから影佐さんと会ったとき、 中国は奥地に逃げても戦うとい 一つのやり方 すぐに ってた

んに言ったことだ。戦後、近衛総理の手記を読んだ時そう思った。 と言ったという。これは影佐さんが松井大将に言ったからで、それはもともと私が影佐さ ではないかと思っている。松井大将が行く時、東京駅頭で、近衛総理に、南京まで行く、 十三日、私の言った話が影佐支那課長より上海派遣軍司令官の松井大将まで伝わったの まあ、 これは自分中心

昭和十二年の暮になり上海・南京に行きますね。

にみえるので、私の本には書かなかったが、充分にありうることだ」

「河相さんが占領地視察に行くというので随行しました。 大晦日の日に東京を出ました」

他にどなたか随行しました。

「二人だけです」

この後岩井さんは南京へ行くのですか

もなホテルや旅館もなく、城内のどこかに泊ったような気もするが、下関に一軒くらい旅 「河相さんと行きました。南京には二日ほど泊りました。陥落後三週間後だったのでまと

館があってそこに泊ったような気もします」

南京の総領事館に行かれたのですか。

「そうじゃない。その時総領事館はどうだったのかな。 とにかく占領地視察ということです」 総領事館に行って何をするとい

南京の様子はどうでした。

なった都市だからこんなものだと思いました」

虐殺の現場を見たとか、あるいは虐殺の話を聞いたとか……。

は自分で確かめる目的もあったのかもしれない」 かった。河相さんは皇軍のそういう噂には神経をとがらせていた正義派だから、 「見たことはない。聞いたこともなかった。東京にいた時もそういう話は聞いたことはな 南京視察

をしてます。ご存知ですか。 アーベンド記者、「ロンドン・タイムズ」のデビッド・フレーザー記者などと会って話 上海に戻ってからだと思いますが、河相部長は「ニューヨーク・タイムズ」

レッ

は英語はわからないし、中国語だからその時は別行動だ」 「私は知らないな。河相さんは英語ができるから外人記者と会って話をしたでしょう。

について何か聞きましたか。 岩井さんは外務省の情報部にいた訳ですが、東京に戻ってから、 外務省の内で、

関心がなくて、聞いたが、記憶に残っていないのかもしれない。 「約二週間支那にいて、一月十三日に東京に戻ってきたが、東京でも聞いた記憶がな

佐々木少将が南京攻略戦に参加し、 が発表になってます。佐々木少将は陸軍きっての中国通で、蔣介石以下国民党領袖のほと 昭和四十年、南京攻略軍に旅団長として活躍した佐々木到一少将の日記(『ある軍人の自伝』) 国民党の革命にもよく理解を示していた。中国に愛情も持っていた。その 陥落後は南京の警備司令官をつとめた訳です。陥落前

にこの事件は起きた。

の南京を最も正しく伝えているのではなかろうか。 陥落後の南京を最もよく知る立場にいた人です。その佐々木少将の記述こそ当

っています」 いろあったと言われているが、佐々木少将が書いていることが事実ではなかろうかと思 私は南京虐殺と言われれているものを見たことも、聞いたこともなかった。南京では VA

はどんなつもりなのでしょうか は直ちに千里を走って海外に大センセーションを引き起こし、 当時東亜局長だった石射猪太郎氏が、戦後、 と書いたり、日本と中国の関係を、 中日とか中日戦争と書いてます。 回顧録で、 南京アトロシティ あらゆる非難が日本軍 石射さん 下に向

東亜同文書院の大内院長が宴席を設けて、大騒ぎでした。 「石射さんも東亜同文書院卒業で、私の学校の先輩です。 石射さんが総領事になった時は

も違ってました。外務省がいわゆる枢軸派が多くなっていく中でも、そういう人とも違っ ていました。中国が勝ったから、 石射さん自身は自分で中国通と思ってました。ただし考えが軍と対立して、 戦後は日中が中日に逆転したのでしょう」 私なんかと

- 二月に改めて上海総領事館に副領事として行かれますが、 この時、 上海で虐殺に 0

て何か聞いてますか。

はなかった」 「二月二十五日に東京を出発して二十八日に上海に行きました。 何度も言うが聞いたこと

以上が岩井氏の証言である

『事官補・粕谷孝夫氏の証言

粕谷孝夫氏は明治四十二年生れで、 ロンドンの大使館勤務から上海の総領事館勤務にかわった。すでに蘆溝橋事件 昭和九年に外務省に入省し、 昭和十二年の七月にな

間もなく上海でも日中は衝突する時期である。

れ南京に行った。二十八歳の時である。 人かが陥落と同時に南京に入ったが、 上海総領事館勤務になって五カ月目に南京が陥落した。上海にいた総領事館員のうち何 年が明けると、粕谷氏も南京総領事館勤務を命ぜら

うと、アリソン領事、 日にはアリソン領事殴打事件が起きた。日本兵に強姦されたという中国女性が犯人を捜そ 昭和十三年一月の南京ではアメリカと権益問題が起きていた。 日本兵がア メリカの建物に無断侵入していると抗議があった。また、 リグス金陵大学教授、 日本の憲兵らと日本の兵舎に入ろうとした時 一月中 旬、 アメ 一月二十六

事を殴ったというものである。また、 たと言われた時期でもある。 粕谷領事官補はこの南京に行ってアメリカなどの権益問題 この時期は、 東京裁判で日本軍の残虐行為が続 いて

日本兵とアリソン領事の間に言い合いがあり、

日本兵がアリソン領

処理にあたった。

終始にこやかに話をしてくれた。 下電器の粕谷氏の部屋であった。 電器に入っている。お話をうかがったのは昭和六十年秋、世界貿易センタービルにある松 粕谷氏は戦後、ペルーやタイなどの大使をつとめた。昭和四十六年に退官してから松下 粕谷氏は七十五歳、 ロマンス・グレーの品のある方で、

南京が占領された時は上海にいらしたのですね

れているというものでありませんでした。 「そうです。上海には大使館と総領事館がありましたが、建物は 一緒で、 仕事も特別分か

などがいましてね、 岡本 (季正) さん、 私は上海地区の問題で忙殺されてました」 田尻(愛義)さん、曽称益さん、奥村(勝蔵) さん、 倭島

日本軍が南京に入ると虐殺事件が起きたと言われてます。その時、 上海の総領事館に

いらした訳ですが、事件のことをお聞きになってますか。

ないのです。上海にいて上海自体のことで手いっぱいでしたから」 「直接聞いたことはありませんでした。虐殺事件とよく言われますが、 私にはよくわから

「そうですか。『ニューヨーク・タイムズ』や中国の新聞は読んでいませんでした」 当時、「ニューヨーク・タイムズ」や中国の新聞が南京のことを書いていますが……。

抗議を出しております。それは上海経由で外務省に送られました。上海総領事館でこのこ 南京にいたアメリカ人やドイツ人が国際難民委員会をつくって、日本の領事館に要望

いたことがありましたか

「そういうことも聞いたことはありませんでした」

本省の東亜局第一課長であった上村伸一氏が、 南京からの抗議、

どが部屋に山積みされた、 と回想録に書いてます。

「ほほう、そう書いてますか。それは初めてです」

年が明けてから南京にいらっしゃいますね。 南京にはその年の十月までおりました」

「一月です。正確な日は覚えていませんが、

「福井(淳)さん。福井さんは総領事代理だったと思います。あとで花輪 南京総領事館にはどなたがいらっしゃいましたか。 (義敬) さんと代

それと若い人が二、三人いたと思います。領事館は、領事館と館邸があって一つのコンパ りました。 田中正一さんと福田篤泰さんもいました。 田中さんは支那語の得意な人でした。

ウンドになってましたので、私はその館邸の方に住みました」 日高信六郎さんはいらっしゃいませんでしたか。

いたと思います。日高さんは私が入省した時の人事課長です」 「八月に南京の領事館が閉鎖になった時にはいましたが、 その後は上海の大使館に戻って

南京の様子はどうでした?

「普通でした。特別なことはありませんでした。店は開いていますし、 虐殺とかそういうことはありませんでした」 日本の商人もいま

第四章

でのお仕事はどんなものです

がアリソン氏で、あとで日本の大使になった人です。 人がいて、 「外国との交渉、折衝ですね。南京には各国の総領事館があり、こことの折衝です。 南京には第三国人の国際難民委員会があって、 権益があり、 そうすると当然トラブルがありますから。アメリカ領事だったの ラーベ氏、 流暢な日本語をしゃべる人でした」 ベイツ氏などがいましたが

彼らとお会いになってますか。

一全然知りません」 -アリソン領事殴打事件が 一月下旬に起きますね?

えええ。 アリソン氏が日本兵の宿舎に抗議か確認かに行って、 歩哨の制止を振り切って歩

哨線を越えようとしたので殴られたと言ってました」

本に抗議したとは言ってましたが、 相当な問題でしたか。 本省のほうでやったらしく、 すぐに解決しました」

アリソン領事はどんな人でした?親日とか反日とか。

「知日派だと思います。そのことで特別感情を悪くしたことはなかったようです 領事官補として、軍とも様々な交渉があったと思いますが……。

外国の領事館から軍に対する問題があると私がこの方と交渉しました。 将の息子さんで、 「軍の情報担当に本郷(忠夫少佐)さんがおられて、この方が渉外の仕事をやってました。 のちにニューギニアで亡くなりましたが、 いい人でした。 本郷 (房太郎)

いてまして、穏やかな人でね。英語をしゃべれて、アメリカにいたことがあるということ 航空の方にかわって、 いわゆる国際派でした。アメリカをよく知っていたんでしょうな。常識派というのか 広田 一度でしたが、武藤(章大佐)さんとも会ってます。 (豊大佐) さんが渉外部長として来ました。広田さんは上海 師団長をやってます。 に事務所をお

偉かったからだろうが、肩で風をきって歩くような人ではなかったですね」

話を聞い

7

それと、

一月末から二月はじめにかけて、東京から本間雅晴少将が上海、 広田大佐が随行してますが……。 南京、

現地の視察と聞いています。広田さんがその時一緒に来たとは知りませんでした。 「その頃本間さんは参謀本部の第二部長で、本間さんが来たというのは聞いていました。

広田大佐から南京事件についてお聞きになったことは

アメリカの駐華大使ジョンソン氏が、 と言ってます。 実際、 南京総領事館ではどうでしたか。 日本の大使館が電報を打とうとすると軍がじゃ

「そういうことはありませんでした。 以上が粕谷氏の証言である。 外務省は自分のを持っていたと思います

たちの見た南京の様子は、次の通りである。 たからである。それでも、多くの方は手紙なり葉書なりで、南京の様子を知らせて下さっ た。数年間にわたって、度々手紙のやりとりをした方もいる。会えなかった人と、その人 生存者のなかで、約半数の方とは会うことができなかった。ほとんどの人が病気であっ

中支那方面軍参謀・吉川猛少佐

三年ほどの間に八度の手紙のやりとりがあり、そのなかで次のように答えてくれた。 ンタビューを申込んだ時、入退院を繰り返しており、会って話を聞くことはできなかった。 しかし、質問に対しては手紙で丁寧に答えて下さった。病気で中断することもあったが、 一一犬嘘を吠ゆれば万犬実を何とやら、 中支那方面軍には六人の参謀がいたが、一番若かった吉川猛氏だけが存命中である。 一度世に宣伝せられし事はこれを反論し世に正し

は放置とは何事ぞと小っぴどく叱られた事があります。松井閣下はそういう御方でした」 任の二宮参謀が松井大将に呼びつけられ、屍体の始末が悪い、 昭和十二年十二月に中支那方面軍司令部を蘇州に推進した時、 日本軍のだけ整理し敵軍の 庶務参謀の小生と後方主

く了解を得ることは難事中の難、第一印象の刻みは人間感情の心の奥に深く食い入るもの

第十軍参謀・寺田稚雄中佐

長として知られている。 寺田雅雄中佐は第十軍で作戦主任参謀をつとめ、 のちノモンハン事件時の関東軍作戦課

手紙で何度か答えて下さった。主な内容は次のとおりである。 インタビューを申込んだ時、 九十歳を超えており、お目にかかることはできなかったが、

上陸するとまっしぐらに前進するというやり方をとったため、 画した。第十軍は上海方面のようになっては大変だったので作戦本位であった。第十軍は 「上海方面の作戦が膠着してどうにも進展しないため、大本営が第十軍の杭州湾上陸を企 最初から後方からの補給を

受けることは不可能だとわかっていた。 これがため、 糧は現地に求めることにした。事実、第十軍の作戦が猛烈果敢であったこ

上海方面の敵軍が一挙に撤退したのです。

でしょうか。第十軍の軍紀がそれほど悪かったとは思わない。 軍紀に関して言われているとすれば糧を現地に求めたため、 悪いと言われたのではない

当時、南京事件を聞いたことはありません」

のならお会いしたいと思ったからである。 寺田氏は福井県小浜市にお住いで、福井に行った時、思い切って電話をした。会えるも しかしやはり病臥中で会うことはできなかった。

補遺

·仙頭俊三大尉

であった仙頭氏は国崎支隊と行動を共にした。 渡り浦口付近に進出して南京付近の敵の退路を遮断することになった。第十軍の作戦参謀 第十軍には国崎支隊(第五師団歩兵第九旅団基幹)がいた。国崎支隊は蕪湖付近で揚子江を

は答えて下さり、また、 仙頭俊三氏は、 病気のためお目にかかることはできなかったが、手紙での問い合わせに 当時のメモも見せてくれた。当時の様子は次のように書いて下さ

(十五サンチ榴弾砲) が盛んに落下していました。揚子江両岸に浮遊した敵の死体は目撃した 「十二月十二日、浦口(揚子江をはさんで下関の対岸)に進出した時、 浦口には味方の十五

ところ数百でしょうか、中流にはあまり死体は認めませんでした。下関の岸壁が鮮血に染

っていたのを目撃し、かつ死体は手足をしばられていたようでした。

かったことはありません」 虐殺ということは当時は全く知りませんでした。軍紀に関して国崎支隊に関する限り悪

団長としても知られている方である。 後藤光蔵中佐は侍従武官として第十軍の前線まで行き、南京にも入った。最後の近衛師

体が丈夫でないというのでインタビューはできなかったが、 南京に入った時の様子を、

せんでした」と書いて下さった。 「南京は人一人いない街となっており、 小生はその一軒に泊ったのですが、 何事もありま

昭和六十一年十二月に亡くなっている。

上海憲兵隊・岡村適三大尉

岡村適三氏は上海事変当時から上海にいて、陥落直後の南京に入った。

老人性虚血症ということで話をうかがうことはできなかったが、質問に対し、

に書いて下さった。

「当時南京事件については聞きませんでした。

丈大尉などから、日本軍の軍紀について特別聞いたことはありません。 上海派遣軍憲兵隊長・横田昌隆中佐、 第十軍憲兵隊長·上砂勝七少佐、 副隊長·藤野鸞

日本軍が威張っているということは聞きました」

もっと詳しく聞きたいと思って、何度かの手紙のやりとりの後電話で申込むと、 憲兵だけに日本軍の軍紀についてよく知っていたと思われるので、是非お目にかかって

と了承して下さった。

忘れる有様ですからお話は無理です、 約束の日、福岡空港から電話をすると、家族の方が電話に出られて、朝言ったことを昼 とのこと。 仕方なく空港から引揚げた。

同盟通信・堀川武夫記者

格別確かなことは見聞しておりません」とのことである。 病気で寝ているということでお目にかかることはできなかったが、 第十六師団に従軍した堀川武夫氏は戦後、広島の大学で教鞭をとった。 「お問い合わせの件

朝日新聞・藤本亀記者

藤本亀氏は十三日、光華門から南京城内に入った。

でしたことをお知らせいたします」という返事であった。 とで会うことはできなかったが、「従軍の間、特別に何の事件も見たり聞いたりはしません 山陽新聞取締役、 山陽放送社長などをつとめた人である。体がよくないというこ

東京日々新聞・浅海一男記者

よう切望します」という返事であった。 の際、「この世紀の大虐殺事実を否定し、軍国主義への合唱、 浅海一男氏は十二月十三日、中山門から南京に入城した。 昭和六十年初めインタビューを申込むと、 記憶が不鮮明なのでとお断わりになった。そ 伴奏となるようなことのない

大阪毎日新聞・西野源記者

当然のことです」とのことである。 お問合わせの件、 西野源氏は名古屋総局から従軍し、 残念ながら聞いたことがありません。 第九師団と共に光華門方面から南京に入城した。 戦場では幾多の流説があるのが

西本願寺・大谷光照法主

城式に参列した。翌十八日、 南京の様子については、 大谷光照法主は十一月に上海の皇軍慰問に向い、 城内の飛行場で行なわれた慰霊祭は法主のもとに行なわれた。 やがて南京に行き、 十二月十七日の入

数回入りましたが、 「完全占領の翌日の十四日夕刻、南京に着き、城内に宿営しつつ四日間滞在し、 もちろん虐殺を見ておりませんし、 噂も聞きませんでした。もうその

るような環境ではありませんでした。日本軍は城内城外に適宜宿営し、 時は戦闘は全く終息していて、市内は平静で、 っていました」 市民の姿もほとんど見かけず、 のんびり休養をと

虐殺の起こ

ということである。

従軍作家・石川達三氏

中央公論社から特派された。 石川達三氏は昭和十年『蒼氓』で第一回芥川賞を受賞、 十二月二十一日東京を発って、 昭和十二年、 上海、 蘇州、 陥落直後の南京に 南京をまわり、

補遺

補遺

313

即日、新聞紙法により発売禁止になり、石川氏は起訴され、九月に禁錮四カ月、執行猶予 ゐる兵隊』を書き、二月十八日発売の『中央公論』に発表した。ところが『中央公論』は 一月下旬に東京に戻った。この時、主に第十六師団の兵士に会い、これをもとに『生きて

三年の判決がおりた。 戦後になり、 『生きてゐる兵隊』は南京事件を扱った小説と言われるようになった。

わかったが、それから三カ月後の昭和六十年一月に石川氏は肺炎のため亡くなった。 昭和五十九年十月、インタビューを申込んだが、会うことはできなかった。理由は後で イン

のである。 タビューを申込んだ時は胃潰瘍が良くなりつつあったが、会えるような状況ではなかった しかし、そのおり、次のような返事をいただいた。

「私が南京に入ったのは入城式から二週間後です。大殺戮の痕跡は一片も見ておりません。 何万の死体の処理はとても二、三週間では終わらないと思います。あの話は私は今も信

じてはおりません」

次の人たちである。 連絡を取っている途中に亡くなったり、病気のため返事をいただけなかった人たちは、

上海派遣軍参謀・松田千秋大佐 上海派遣軍報道班長・米花宇太吉少佐

南京特務機関・小島友宇氏 上海派遣軍写真班長・一色達夫氏

南京特務機関・馬淵誠剛氏

第十軍参謀・清水武男大尉 第十軍参謀・山崎正男少佐

外務省情報部・後藤光太郎氏 南京領事館・福田篤泰領事館補 中部防衛軍参謀・宮本清一中佐

内務省内務事務官·池野清躬氏 同盟通信・前田雄二記者

同盟通信 ·不動健治写真部長

祓川親茂カメラマン

同盟通信 ・高崎修力メラマン

同盟通信・菊地久太郎無電技師

運輸通信長官部野戦高等郵便長・遠藤毅氏 朝日新聞・田畑雅カメラマン